
結晶戦士・仮面ライダー（ダイヤ）

闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結晶戦士・仮面ライダー（ダイヤ）

【Nコード】

N7733M

【作者名】

闇

【あらすじ】

七つの秘密が巡る町『七都』。その北地区で起こる事件。人間の『心』を食らう怪人『ゲムルグ』と奴らを率いる軍団『アンドロメダ』。これは、七都に引越してきた不運な青年『菱形 大夜』と、地球を救う使命を背負った少女『梓』が奴らに立ち向かう結晶物語である。

作品介绍

『結晶戦士』…それは人類が開発した……究極の兵器。

突如上空に出現した謎のUFO。そこから射出される人間の『心』を食らう謎の怪人『ゲムルグ』。

奴らが現れたのは、七つの秘密が巡る町『七都』の北地区。

平穏な暮らしは消え、日々怯える市民達。しかし、結晶戦士の存在が彼らの希望だった……が、

大量のゲムルグが研究所を襲撃。そのほとんどのシステム『クリスコア』を奪われてしまった。

残った最後のクリスコア…『ダイヤコア』は、人類にとって最後の希望の光となった。

この物語は、この七都に引っ越して来た不運な青年と、地球を救う使命を背負った少女の…結晶物語。

本編は九月からスタートします。

戦いの舞台北地区と登場人物（前書き）

世界観の説明などです。

戦いの舞台北地区と登場人物

―七都・北地区―

七都は北地区と南地区と別れているが、元々は一つの町であった。

では、何故別れたか？

その原因は、南地区にある。

南地区は海に面しており、外交の中心地だ。

故に、密輸というものが存在する。

密輸物は色々あるが、七都を北地区と南地区に別けた原因の品……
…それはガイアメモリ。

南地区でガイアメモリが流通しだし、この流れを北地区に及ぼさないようにするために、一つの町を二つに別け、遮断したのだ。

南地区から北地区に行く場合は、政府が結成した『保安警備隊』の入念なチェックを通らなければならないため、北地区にはメモリの流通はしていない。

では、これを踏まえた上で今作の戦いの舞台……七都の北地区について話そう。

北地区は南地区と違い、海ではなく、山の方に面しており、光化学

工業が発達している。

そして、この光化学は更なる進化を遂げる事になる。宇宙からの侵略者『アンドロメダ』に対抗するために、『光化学研究所』がプリズムを用いた『クリスコア』という戦闘システムを開発したのだ。

このクリスコア……詳しい事は本編が始まってからのお楽しみという事で。

では、今作に登場する登場人物達を紹介しよう。

【菱形 大夜】

年齢16歳。自他共に認める『ヘタレ』。

彼の両親は一年前に他界しており、その影響で親戚の住む『七都』の北地区に引っ越して来たというわけだ。

現在は高校二年。

【梓】

謎多き少女。

大夜を戦いの螺旋に導いた張本人。

趣味は読書（ただし、BL系小説）。根っからの腐女子である。

好物は、男同士の絡み。

ヘタレな大夜を嫌っており、「少しは、男らしくなりなさい!!」
と言いながら、大夜をBLの道に引きずり入れようとする。

【菱形 直也】

大夜の叔父。

『光化学研究所』の所長。
極度の女好き。

ちなみに、バツイチ。

今作に出てくる怪人は『ゲムルグ』と『アンノウン』である。

ダイヤと少年と逃げた平穩（前書き）

ぐだぐたゝ。

ダイヤと少年と逃げた平穩

「……………」

「梓…」

「ジュエリ、今は逃げる事だけを考えて!!」

「うん…」

セミロングの十六くらいの少女と五歳くらいの可憐な女の子が何者かから逃げ惑っていた。

「逃がさん! 変身!!」

《リリアクラッシュ!!》

男はブレスレッドに結晶状の物をセットすると、紫色のライダー『リリア』に変身し、ジュエリという女の子に梓と呼ばれた少女に襲いかかる。

「ジュエリ! 伏せて!!」

「うん!」

梓は携帯を取り出し、コードを入力する。

そして、バイクのようなマシンがリリアに突撃する。

「ぬあっ！」

リリアは吹っ飛び、もがき苦しむ。

「ジュエリ、乗って！！」

「わぁーい♪ドライブだぁー！！！」

「呑気な事言わないでよ！！！」

梓は水色の菱形の結晶が埋め込まれたバイクに跨がり、後部座席にジュエリを乗せ、発進した。

「すいません。ダイヤコア、並びにコアベルトを逃しました」

リリアは何者かと交信を行う。

『構わない…暫く泳がせておけ』

「御意」

リリアは変身を解き、その場を跡にした。

―七都・北地区―

「ふう。やっと着いた」

短めの、これといって特徴の無い平凡な少年は担いでたバッグを下ろし、空気を思いつきり吸うと、気分の悪い顔になった。

「おえ…排気ガスとかで気持ち悪っ…こんな事なら、自然溢れる南地区の方がよかったかも」

少年は眉を潜めて、住所と地図が記されたメモを見る。

「『菱形結晶開発研究所』…か。名前だけは長いけど…所長の叔父さんがああじゃなあ……」

少年は肩を落とし、

「父さん、母さん。どうか、この町では平穏で暮らせるよう…御願います」

両手を合わせて、空を拝む。

「思えば、貴殿方両親が事故で死んでからというもの、色々大変でした。借金取りに追われたり、追われたり、追われたりの毎日でした。決して、クリスマスの夜に借金を肩代わりしてくれる可愛らしいお嬢様は現れませんでしたし。学校でも軽音部などの楽しそうな部活に入りませんでしたし、ハーレムを目指す副会長の居る生徒会にだって入りませんでした。ましてや、エリア11で緑色の髪の女の子と契約を結びませんでしたし――」

ええ…なにやら危ないネタを遠回しで唱えてますが、気にしないで下さい。

とりあえず、それだけ彼の過去が暗いという事を理解していただければ…幸いです。

「とにかく!!」

少年は明るく大きい声で宣言する。

「俺、『菱形大夜』は…この町で平穏に暮らします!!普通の男の子に戻ります!!」

とまあ、どっかの昭和のアイドルが解散の時に言った名台詞ぽい事を言った。

さて、彼の平和はいつまで続くのか。

『キシヤアアアア!!』

怪人出現。

三秒で終わりました。

「うつひよおおお！！俺以外誰も居ないと思ったら、皆避難してたのか！！」

少年…大夜はすぐさま逃げ出しました。

「うおおおお！！」

怪人の姿は黒く、胸部にはクリスタルのようなものが嵌め込まれており、顔は虫のカマキリのようなものだ。

「はぁ…はぁ」

大夜は倉庫の中に隠れる。

「な…なんだよ、あれ……俺…こんなの聞いてないぞ」

「誰？」

「ん？」

大夜の背後にジュエリが駆け寄る。

「君…どうしたの？お母さんは？」

「？梓なら居るよ」

「え？どこ？」

ジユエリは倉庫の奥を指差す。

「だ、誰か居るんですかぁ？」

大夜は声を震わせながら声を奥に向かって投げ掛けると、

「誰？あんた」

梓が出てきた。

「え？……君がこの娘のお母さん？」

——ドガアアアン——

大夜の近くにあったガラクタが大夜の頬をかすめながら後方に吹っ飛ぶ。

「誰が子持ちですって？私はまだ、清らかな○○よ——」

「誰もそこまで言っていないから——あと、○使うな——」

「こついつネタは、読者が喜ぶでしょう？」

「すげえ偏見——ライダーファンの読者に謝れ——」

すると、

「ねえ」

「「ん？」」

ジュエリは二人に声をかける。

「今の会話…もつと駄目だと思うよ」

「……………。すみません」

五歳の娘に諭された二人は、冷静さを取り戻す。

「とにかく。ねえ、君達…あの黒い怪人みたいな何？」

「あれは『ゲムルグ』よ」

大夜の問いに、梓が応える。

「ゲムルグ？」

「そう」

——バアアアアン——

すると、倉庫をぶち破って先程のゲムルグ…『マンティスゲムルグ』が現れた。

「あわわ！ど、どうしよう？！」

「仕方ないわね…ジュエリ？」

「ぐぶ…りょくかい」

クッションに顔を埋めていたジュエリは顔を上げ、梓の下に駆け寄る。

「ほら、あんたも!!」

「お、俺も!?!」

大夜は嫌そうな顔で梓の隣に立つ。

「そついえば、あんた名前は?」

「菱形大夜」

「ダジャレ?」

梓は呆れた表情で大夜を見つめる。

「よく言われる。そつ言うお前は?」

「私は梓。この子はジュエリ」

「よろしく」

ジュエリは嬉しそうに手を振る。

「じゃ、行くわよ!!」

梓とジュエリは両腕をクロスさせ、

「変身!!」

「へ〜んしん」

梓とジュエリは光に包まれる。

梓はコアベルトに変身し、大夜の腹部に装着され、ジュエリはコアベルトの空いた空間にはまりそうなダイヤコアに変身した。

「な…何これ…」

『ほら、早くダイヤコアを嵌めなさい!!』

コアベルトから梓の声が出る。

「うおっ?!」

『あはは、大夜、ビビリすぎたよお?』

ダイヤコアからジュエリの声が鳴り響く。

「もう!こうなったらやけくそだあああ!!」

大夜はダイヤコアをコアベルトにセットし、コアベルトに取り付けられた五色のスイッチの内、水色のスイッチを押す。

すると、セットしたダイヤコアから水色の菱形の結晶が排出され、大夜は両手の人指し指と親指で挟み、反転させ、

「変身!!」

ダイヤコアに菱形の結晶をセットする。

《ダイヤクラツシュ!!》

大夜は水色の光に身体が包まれる。

大夜を包んだ光は暫くして全体にひびが入り、光のベールが消える。

中から黒を基調として、菱形の形をした水色の瞳と、胸部を覆う水色のダイヤクリスタル、両肩に取り付けられた水色のダイヤシヨルダー、両肘、両膝に取り付けられたダイヤエナジの詰まったダイヤアンクル……それらを装備した結晶戦士が現れた。

彼の名は、仮面ライダーダイヤ。

ダイヤと少年と逃げた平穩（後書き）

こんな始まり方ですんません。

ダイヤと痛さと平穏は無い

ダイヤは自分の姿に戸惑う。

「な…何だこれ？どう…なってるの？」

鏡に目を向けると、慌て出した。

「何だ、これ！？これ…俺？！」

ダイヤは再び身体全体を見渡すと、

『あんだ、ナルシ！？自分の姿に見惚れてないで、さっさと戦いなさいよ！…！』

コアベルトに催促される。

「ナルシじゃないし、見惚れてもないよ！…！」

ダイヤは気を取り直して、マンティスゲムルグに突っ込む。

「せいや！」

『キシヤアアアアア！…！』

マンティスゲムルグは素早く避け、胸部の結晶体『ゲムクリスタル』からエネルギー弾を放つ。

「うおっ？！…」

ダイヤは咄嗟に避け、体勢を整える。

そして、マンティスゲムルグに殴りかかる。

「おりゃああああ!!」

しかし、

―バキイイイ!!―

「痛っ!!」

ダイヤはマンティスゲムルグを殴った自身の右手を労るよう撫でる。

「コイツの装甲…固い!!」

『ゲムルグの装甲は、肉体的ダメージによって半減するわ。もっと攻撃しないと!!』

「無理!今の一撃で殴る気失せた!!」

ダイヤは泣きながら攻撃を拒む。

『梓、ゲムルグはデనికిに弱いよぉ』

『そっいえば、そうね』

ダイヤコアの提案に納得するコアベルト。

『大夜、電気をマンティスゲムルグに浴びせて』

「電気？」

ダイヤは辺りを見渡す。

「無いよ、そんなもの」

理由、辺りは草原だからだ。

『じゃあ、戦いなさい』

「えええ?!」

『男ならシャキツとしなさい!!このヘタレ!!』

「……………どうせヘタレだよ」

ダイヤは脱力しながら、右手を引き、左腕を前に突きだす構えを取る。

『なにするの?』

ダイヤコアは興味津々に聞く。

「今から…敵を砕くんだよ」

次の瞬間、ダイヤは足のつま先で加速し、マンティスゲムルグを引っ込めた右手で宙に飛ばし、左腕で裏拳を決める。

『グワアアア！！』

マンティスゲムルグのゲムクリスタルにひびが入る。

『大夜！銀色のスイッチを押して！！』

大夜はコアベルトに言われ、ベルトに取り付けられた銀色のスイッチを押す。

すると銀色の結晶が排出され、ダイヤは反転させてダイヤコアにセツトする。

《ファイナルクラッシュ！！》

ダイヤの右足が結晶化し、ダイヤはマンティスゲムルグに回し蹴りの『ダイヤモンドキック』をマンティスゲムルグのゲムクリスタルに放つ。

『キシヤアアアア！！』

マンティスゲムルグのゲムクリスタルが完全に砕けると、マンティスゲムルグは砂となって消滅した。

「や……やったの？」

ダイヤはダイヤコアをコアベルトから引き抜き、変身を解く。

「ねえ、君達は一切――」

大夜は少女達の方を向くが、そこには誰も居なかった。

「なんだっ たんだろ？」

大夜はバッグを担ぎ上げて、叔父の研究所を目指す。

「ま。もうあんな非日常とはおさらば… やっぱり平穩が一番だよな
あ」

そう呟きながら、草原を跡にした。

――？？？――

「理李亜… 何故マンティスゲムルグに襲わせに行った？」

玉座に腰かけた男が若い青年に問う。

「あれは奴の独断です。私の知ったことじゃありません。所詮はワ
ームランクのゲムルグ… 本能でしか動けない奴らですからね」

「ほう…」

「それに陛下… 我々が地球に飛び降りるのは八百万年ぶりですが…
… 危惧すべきはクリスコアだけではありません」

「フウガとカギト…それにデイズか？」

「はい」

玉座に腰かけた男は空を見上げる。

「過去の遺物など…取るに足らないな」

— 光化学研究所 —

別名、菱形結晶開発研究所。

「叔父さ〜ん、居ますか〜？」

「はあ〜い♪」

大夜は研究所の玄関で声をあげると、ジュエリが出迎えた。

「ジュエリ？」

「わあ〜♪大夜だ、大夜だ♪」

そのまま大夜の腹部に抱きつく。

「って事は……」

「ジュエリ？どうしたの……っ……」

大夜は梓と目が合う。

「「あああああ！」「」

二人は互いを指差しながら叫んだ。

——父さん、母さん。俺は平穩に嫌われたようです——

ダイヤと叔父と変態野郎（前書き）

自分の文才の無さに

鬱だ。

これ書いたらさらに鬱になった。

ダイヤと叔父と変態野郎

「——と、いうわけ」

「どういうわけ?! なんか説明しましたみたいな空気流れたけど、あんた何一つ説明してないからね!？」

「ちつ。説明する手間が省けると思ったのに」

「なめんな!!」

大夜は説明を渋ろうとする梓に全力で抗議する。

「説明めんどくさいのよね。どうせ、文字数無駄に稼ぐだけだし」

「このやりとりで文字数を無駄に稼せいでと思うんだけど?!」

「二百文字行ってないし、別に良いんじゃない?」

「ここまでで百八十文字使っちゃったよ!？」

「んなもん、無いに等しいわ」

「だから、なめんな!!」

すると、ジュエリが大夜に駆け寄る。

「大夜あゝ。怒っちゃダメ」

「……………」

——なんだろ？

なんか癒される——

「ロリコン」

「っ！俺は年下好きじゃないから！！」

「ヘタレロリコン」

「うつさい！！」

大夜は一旦、ペースを整えようとする。

しかし、

「やあやあ、皆元気だね」

めんどくさいのが現れた。

「あ、叔父さん」

「やあ、大夜君。久しぶりだね」

大夜の叔父…『菱形直也』は着崩れた白衣を纏いながら、大夜に話しかける。

「それはそうと、大夜君」

「何ですか、叔父さん？」

「ハーレム最高だね」

「……………。そんなだから、奥さんに逃げられたんじゃないんですか？」

直也はバツイチ。さらにかなりの女好き。

「ハハハ！いやあ、相変わらず大夜君は人の痛い所を的確に指摘するねえ」

「五月蠅いですね、ひぐらしの時報的な立ち位置の人」

「ト〇ーをなめちゃいかん！！彼の富〇フラ〇シュは凄いんだからね！！！」

「知るか！！！」

大夜は直也を蹴り始める。

「痛い！痛いよ、大夜君！！！」

「大夜〜！」

ジュエリが割り込んでくる。

「直也を虐めちゃダメ！！！」

「……………」

大夜は無言で蹴るのをやめる。

「ジュエリちゃんは優しいなあ」

大夜の蹴りから逃れた直也は、ジュエリの頭を撫でる。

「梓。あれが本当のロリコンだよ」

「キモいわ……」

大夜と梓は、直也を気持ち悪がる。

「ひどいなあ。僕が好きなのは、十六歳以上だよ。そつだなあ……梓ちゃんがそろそろ食べ——」

「いやあああああ！——」

梓は拳をきつく握り締めながら直也に突撃する。

「え、ちょ……まっ——」

「バキィィィィン！——」

「……………」

直也は地に伏した。

「叔父さん……… あんた馬鹿だよ」

大夜は同情と輕蔑の混ざった微妙な表情で直也を見下ろす。

「で、梓」

大夜は顔の向きを梓に切り替える。

「あのゲムルグっていう怪人について…説明してもらえるかな？」

「まあ、いいわ」

梓は大夜にゲムルグの事を説明しだす。

内容を簡略的に言うと、ゲムルグは上空に飛来している『アンドロメダ』というUFOから射出され人々を襲う怪人であり、ゲムルグは『奴ら』に保管されている。『奴ら』は地球外生命体で、過去の大昔に栄えたりント文明の人々に圧倒的な技術力を与えた者達であるという。

その後地球を離れ、どこか遠くの惑星に行ったらしいが、近年…地球に再び飛来。ゲムルグを射出し、人々の『心』を喰らい始めた。

「心を喰われた人間は、どうなるの？」

「身体が砂となって、跡形もなく消えるわ」

さらに、ゲムルグの中にも階級があり、下から順番に『ワームランク』、『ビーストランク』、『ヒューマンランク』という三種類に分かれる。

ワームランクのゲムルグは本能に忠実で、猪突猛進とした戦闘スタイルが特徴的。
姿は虫。

このワームランクのゲムルグが一定量の心を喰らうとビーストランクにランクアップする。

ビーストランクのゲムルグはワームランクのゲムルグと違い、頭腦的な戦い方を行う。更に人の言葉を理解し、話す事も可能。
姿は魚類や鳥類や哺乳類のような姿をしている。

そして極稀に、ビーストランクからヒューマンランクという階級にランクアップする者が居り、一般的に『幹部』と呼ばれる。
姿は人間の形をしているが、ビースト態に変化も可能。

「そしてヒューマンランクの幹部達は、この光化学研究所から奪ったクリスコアで変身して襲ってくるわ」

「どうして奪われたんだ？」

「さあ？本人に聞いてみたら？」

梓は直也を指差す。

「叔父さん、なんで奪われたの？」

「いやあ、ヒューマンランクのゲムルグに女幹部が居てね…ついつい誘惑されちゃって」

「何してんだ、あんたは!!」

大夜は再び、直也を蹴りまくる。

「男は皆…欲望に忠実な狼なんだよ!!」

「それはあんただけだ!!」

大夜は蹴る強さを上げる。

「痛い!あれ?…なんか気持ちいい……やっぱ、痛い!!」

「大夜、貴方の叔父さん…Mに目覚めるわよ。それ以上蹴ると」

「堕ちるとここまで堕ちちまえ!!」

——父さん、貴方のお兄さんは変態です——

ダイヤと叔父と変態野郎（後書き）

自分の好みは、ボーイッシュな女子!!

.....。

すみません。

ダイヤと学校となんかヤバイ―前編―（前書き）

中途半端と言われるかもしれませんが。

しかし、精神的に書けませんでした。

だから前編と後編に分けました。

文句ある人は……私が心から謝罪するので許してください。

因みに今回は梓とジュエリは一切出てきませんし、大夜も変身しません。

学校内が舞台の話は基本的にほのぼのとしています。

ライダー小説じゃないね、すいません。

ダイヤと学校となんかヤバイ―前編―

―教室―

「転校生か…。お前、男と女どっちに賭ける？」

「そりゃあ、やっぱり女だろ！！」

「男だったら、女子が喜ぶだけだしな」

そこそこ顔の良い三人組は、転校生のやって来る噂を聞き、今か今かと楽しみにしている。

―ガラガラ―

扉が開き、25くらいの青年が入ってきた。

「ほら、ホームルーム始めるぞ」

「外矢先生！転校生は！？」

「転校生？…ああ」

外矢という教員は教室の扉の方に顔を向ける。

「入って来ていいぞー」

「は、はい！！」

扉が開く。

（女か？）

（頼む！女であってくれ！！）

（これ以上肩身の狭い学校生活は嫌だ！！）

入ってきた生徒は……

……

「菱形大夜です！よろしく願いします！！」

男でした。

「」「ぬあああああ！！」「」

三人組はずっこけ、後頭部を地面に激しくぶつける。

「」「そして痛ってええええ！！」「」

三人は一斉に頭を抑えてのたうち回っている。

「菱形。担任の俺から言える事は一つだけだ」

「はい？」

「あの三人は気にするな」

「……はい」

―数分後―

「という事で、改めて自己紹介だ」

外矢教員は大夜に自己紹介を始める。

「俺の名前は外矢司。通りすがりの教師だ……覚えておくんだな」

「通りすがりって……」

「因みに俺は面倒事は嫌いだから。面倒事を起こした奴は教師の権限で片っ端から退学な」

「無駄に厳しい!!」

外矢教員は適当にクラスの生徒を指差す。

「おい、そのクラスメートA」

「クラスメートA?!先生、俺の名前山田っす!!」

「俺の記憶に留まらない奴は必然的にクラスメートA〜Zのどれかになる。覚えておくんだな……そんな事より、ジュース買ってこい」

「そんな頼み方じゃ誰も買いに行かないっすよ!!」

「さっさと買ってこい。早くしないと退学だぞ?」

「すぐ行ってくるっす!!」

山田…もといクラスメートAは退学を阻止するために教室を出ていった。ジュースを買うために。

外矢教員はクラスメートAが出ていった教室の出入口を見つめる。

「今の時間帯…教師が巡回しているからな……アイツ生徒指導室行きだな。別に今すぐ買ってこいって言っていないのに(ニヤリ)」

外矢教員は大夜の方を向く。

「俺の趣味は生徒いじりだ」

「嫌な趣味ですね」

外矢教員は軽くスルーし、教室を一通り見渡す。

「あそこ空いてるから座れ」

後ろに空いた席が二つあり、大夜は向かって右側の席に座った。

因みに、前の一行には三人組が座っていた。

「よろしく」

「「「どうも」「」」

見事なシンクロである。

―休み時間―

「おい、転校生」

「はい？」

大夜は顔をあげると、前に三人組がいた。

その三人組のリーダー格の男子生徒が前に出る。

「ちょっとついてこい」

大夜は呼び出しをくらった。

―路地裏―

（なんか面倒なのに絡まれたなあ……）

大夜は内心げんなりしながら三人組の後をついて行き、学校の路地

裏にまで連れて来られた。

「いいか、転校生。お前に一言だけ言っておく」

——父さん、母さん。俺のこの時知りませんでした。この学校の真の恐ろしさを——

ダイヤと学校となんかヤバイ―前編―（後書き）

次回、大夜の通う学校はモンスターの溜まり場だった！？

ある意味でモンスターです。

ゲムルグは出ません。

大夜と学校となんかヤバイ―後編―（前書き）

久々の更新です。

前作の内容が多少絡みますが、初見でも問題ないように執筆しました。

大夜と学校となんかヤバイ―後編―

「いいか、転校生。お前に一言だけ言っておく」

次の瞬間、三人組のリーダーが衝撃の一言を言う。

「この学校の女子には気をつけろ」

―三時間後―

三人組にそう言われた大夜は、学校の廊下を歩いていた。

今は授業が終わり、放課後。

ゆっくり学校見学を行っている。

すると、

「菱形君！」

大夜は一人の女子生徒に声をかけられた。

「はい？」

「その菱形君…好きな人居る？」

「!」

大夜は目を見開く。

——まさか…まさか告白?!

俺にもついに春が来たのか!——

大夜は女子生徒に言う。

「と、特には居ないよ!」

「そう……」

女子生徒はしょんぼりした様子で去っていった。

「……………あれ?」

——どこかで……地雷踏んだ?——

「何だっただろ?」

「菱形先輩!」

今度は後輩の女子生徒に声をかけられた。

「何?」

「ズバリ聞きます!先輩は受けですか?それとも攻めですか?」

「ブッ!」

大夜は咳き込む。

「何……聞いているの？」

「先輩の性癖に決まってるじゃないですか！さあ、後輩である私に先輩の男の遊び方を教えて下さいです！！」

「俺にそんな趣味は無いよ！！」

「照れ隠しはいらなです！！」

「照れてないから！！」

——ヤバイ、頭がクラクラする——

大夜は頭痛にうなされ、その場から離脱する事にした。

「じゃあね！！」

「ああ、先輩！待って下さいです！！」

後輩女子生徒の声を振り切り、大夜は逃げた。

——執務室——

「どうした、菱形？」

「どうもこうもないですよ！何なんですか、この学校！？」

執務室にやって来た大夜は外矢教員に聞いただす。

因みに、ここに来るまで四回ほど先程の後輩女子生徒と似たような質問をされた。

『好きな男性のタイプは？』

『彼氏募集中ですか？』

『本命は誰ですか？！』

などなど。

「ああ、そっぴやお前に言ってなかったな」

外矢教員は大夜に真相を伝える。

「この学校、一昨年まで女子校だったんだよ。それで、この学校には百合とか腐女子とか多いってわけ」

「なんで共学にしたんすか……」

「理事長の気まぐれ」

「理事長誰ですか？」

「俺」

.....
...。

「はい？」

「だから俺。この学校の理事長」

「はあ?!」

大夜は身を乗り出す。

「理事長がなんで担任やってんですか?!」

「事務作業がめんどくさいんだよ」

「じゃあ今、誰が事務作業をしているんですか?!」

「機械コウモリとかに任せた」

——理事長室——

「司の野郎、覚えてろよ!!」

金色の機械コウモリ『キバットバット三世』が泣きつ面で書類に判子を押す。

「まあまあキバット兄やん。抑えて抑えて」

緑色の機械コウモリ『キバーレ』がキバットを宥める。

すると、竜型のメカ『タツロット』が書類を抱えてやって来た。

「書類、増加ファイバー!!」

「「はあ……」」

二体の機械コウモリは、溜息を漏らす。

――執務室――

「いやあ、おかげで楽で楽で。毎日楽しいなあ」

外矢教員は明後日の方向を見て乾いた笑い声をあげる。

――最低な理事長だ……よく学校が保つよな――

「で。この学校について、他に聞きたい事はあるか？」

「いえ、特には……」

「じゃあ帰れ。早く帰らねえと……」

外矢教員は執務室の窓に目を向け、僅かに通り過ぎた影が映るのを見逃さなかった。

「不審者が現れるからな……」

「あ、はい」

大夜はバックを担ぎ、執務室を後にした。

「さて……と」

外矢教員は立ち上がり、大夜が出てった方とは逆の扉を開ける。

「おや？トイレですか、外矢先生？」

教頭が外矢教員に訊ねる。

「いえ……ただ」

外矢教員は口元を歪める。

「害虫駆除に」

――校庭裏――

「いやああああ!!」

女子生徒は絶叫し、ビーストランクのゲムルグ『ライオンゲムルグ』から必死に逃げていた。

『逃げるな、人間!』

ライオンゲムルグの手が、女子生徒に伸びたその時

『ぐあ!!』

ライオンゲムルグは何者かに石をぶつけられ、うろたえる。

女子生徒はそのまま逃げて行った。

『何者だ!!』

「俺の学校の生徒に手を出すなんて、いい根性してるよな」

外矢教員……いや、『司』は石を持ちながらライオンゲムルグの前に現れた。

そして、黒いバツクルを腹部に装着させる。

「この学校に来たこと……後悔させてやるよ」

黒いライドブッカーから『DECIDE』と書かれたカードを取り出した。

「変身!!」

《カメンライド……ディサイド!!》

―数分後―

ライオンゲムルグは、跡形もなく消滅していた。

「さてと……帰るか」

外矢教員は執務室にへと向かった。

過去とカギトと赤い戦士（前書き）

ハハハ…主人公、変身しないです。

次回、変身すると思います。

過去とカギトと赤い戦士

— 光化学研究所 —

「直也あゝ」

ジュエリは受話器を片手に持ちながら、直也に駆け寄る。

「どうしたんだい、ジュエリちゃん？」

「電話だよお」

直也は受話器を受け取る。

「はい、もしもし。菱形直也ですが？」

『菱形博士、お久しぶりです』

「その声…永瀬さんか。どうしたんだい？」

『実は……フウガが目覚めたらしいんです』

永瀬という男の言葉を聞き、直也は少し表情を曇らせる。

「なるほど、なら……おそらくこっちでは“カギト”が現れるだろうな」

『古文書に記されている通りに事が運ぶとすると世界は、滅びの末路しかありません』

滅びの末路…その言葉に直也は、誤っていると感じた。

「永瀬さん、それは違う。世界は滅びない……滅ぶのは、我々の今の文明だ。人間は力を付けすぎた、だからこそ、文明の節目が来たんだろう。俺達の世界は、リセットされるんだよ」

そうだ。

いつだって、力を付けすぎた文明はその度に歴史の渦の中で消えていった。

超古代に栄えたマヤ文明やリント文明が、その典型的な例だ。

『ですが、僕はそんな事を実行されるのは御免だ』

『この男は分かってないなあ』と、直也は思った。

「それは俺も同じさ。でもさ、人間の力じゃどうにもならない事だと思うよ?」

『……………』

永瀬が黙り、直也は自嘲気味に微笑む。

——俺は、諦めたんだ——

「じゃあね。そろそろ大夜が学校から帰ってくる頃だし」

そう言って

—ブツ—

一方的に電話を切った。

「分かってる。俺は諦めた……。弟とその嫁さんが死んだ時から」
直也は目を瞑る。

そして、彼の弟……すなわち大夜の父親が死んだ日をぼんやりと思
い浮かべる。

『死因は不明です。しかし、一つ言える事は、人のできる所業では
ありません』

——担当医にそう言われ、俺は絶望した。

人外の仕業だとしたら、俺には何もできなかったから。

それから研究者として人間の“心”を研究した。

何故かは分からない。だが、何となく興味が湧いた。

ただ、それだけ。

そして、俺は見つけた。

人の心に潜むカギトという光を……—

「そうだ。弟とアイツの嫁さんは……アンノウンに殺されたんだ」

直也は感情の無い瞳で呟く。

「俺の心は、あの日に砕かれたのかもな」

―学校―

大夜はまだ学校に残っていた。

理由は

「なんでお前が学校に来てるんだよ、梓」

梓の姿を校舎内で見かけたからだ。

大夜に問いただされている梓は、視線を反らし、うっとおしそうに呟く。

「私がいつどこに居ようと、私の勝手でしょ？なんで一々あんたに話さなきゃなんないのよ」

「あのなあ、俺達は仲間だろ？協力しようぜ？」

「ふん、ヘタレのくせに」

「ヘタレで悪かったな!!」

梓は溜息を吐き、大夜に話す。

「この場所で、ゲムルグの反応があったのよ」

「ゲムルグの?!」

大夜は身体を180度回転させ、

「あー俺帰らないと叔父さんに怒られるー」

と棒読みで言いながら帰ろうとする。

しかし、

——ガシッ——

「私達、仲間なんでしょ？協力するわよね？」

肩を掴まれ、大夜は汗を流す。

「ナンノコトヤラ」

「いいから、来なさい!!」

「あうう」

大夜は梓に引き摺られながら校舎へと戻っていった。

―グラウンド―

「古代先生」

一人の女子生徒が体育女教師の『古代優希』に声をかける。

「どうしたの？」

「荒宮君は今日も欠席ですか？」

「荒宮って……『荒宮真』のこと？」

「はい」

優希は少し考え、女子生徒に言う。

「相変わらず、欠席だよ」

「そう……ですか」

女子生徒は残念そうに俯き、グラウンドを去ろうとする。優希はそんな彼女に声をかける。

「心配なの？」

声をかけられた少女は振り返り、力無く笑う。

「彼は、私の幼馴染なんです……今までずっと一緒だったから、どうしたのになって。ただ、それだけです」

そして、今度こそグラウンドを去って行った。

「心に闇を抱えてるみたい、あの子」

優希はそう呟き、陸上部の部員の練習を眺める。

因みに彼女は、陸上部の顧問です。

――帰宅道――

『キシヤアアアアア』

アントロードは物陰から、先程の女子生徒を見つめる。

そして、右手の人指し指と中指で左手の甲を二回擦る。

「!？」

アントロードの気配に気付いた女子生徒は慌てて逃げ出した。

「またなの?! また…殺しに来たの!？」

『グアアアア!』

アントロードは地中から女子生徒の足を掴み、引きずり込もうとす

る。女子生徒は力の限り叫ぶ。

「たすけてええええええ！！」

「グワウ!!」

女子生徒の叫びを聞き、赤い戦士がアントロードの手を引きちぎった。

「キシヤアアアアアア！」

アントロードは右手を抑え、赤い戦士を睨む。

「ガルス……」

ガルスと呼ばれた赤い戦士は女子生徒に振り向く。

「早く逃げろ!!」

「貴方は……誰……なの？ また、私を助けてくれた……。貴方は誰なの？！」

「俺は……」

ガルスはアントロードに向き直り、戦闘の構えを取る。

「俺はただの化け物だ!! 早く家に…… お前の家の中に入れ!!」

そう言つて、アントロードに飛び蹴りを決める。

女子生徒は無我夢中で走り、彼女の家に駆け込んだ。

女子生徒は急いで二階に上がり、自分の部屋の窓からアントロードとガルの戦いを見つめる。

「貴方は、誰なの？」

「くううう」

ガルは両手を交差させ、

「うあああああ！！」

口のクラッシャーを解放させる。

すると、両足のヒールクロウが大きくなる。

ガルはそのままジャンプし、アントロードにかかと落としを決める。

『ウガア！！』

アントロードの肩にヒールクロウが食い込み、ガルはそのまま蹴

り飛ばした。

『グアアアアア!!』

アントロードはそのまま爆発四散した。

「はぁ……はぁ……」

ガルスは疲労したらしく、足がふらつく。

「うつ!」

そして、糸の切れた操り人形のように、その場に倒れた。

その光景を見た女子生徒は家から飛び出し、ガルスの元に駆け寄る。

「そんな……」

駆け寄った女子生徒は信じられないものを見た。

「どうして? どうして……」

彼女は見た。

何を?

疲労したガルスは倒れる際に変身を強制的に解いたのだ。

「どうして、彼が真なの?!」

ガルスに変身していたのは、彼女の幼馴染みである『荒宮真』だった。

過去とカギトと赤い戦士（後書き）

主人公変身させたいけど、中々難しいです。

司やレフトや礼司みたいに大胆な性格の主人公だったら簡単にできるのに。

ヘタレな主人公は、扱いが難しいです。

ダイヤとルチルとナルシな幹部

― 体育館裏 ―

「なあ、梓。本当にここにゲムルグが居るのか？」

大夜は辺りを見回しながら様子を伺い、梓に訊ねる。

「ええ、それもすぐ近く。この感じは、おそらくヒューマンランクね」

「ヒューマンランク？」

「前にも説明したでしょ？ゲムルグには階級があつて、ヒューマンランクはその最上位。つまり、ゲムルグを管理しているアンドロメダの幹部という事」

「ふん」

大夜は興味無さそうに体育館の倉庫に目をやる。

「ああ、ボクは今日もなんて美しいんだ……」

超ナルシな台詞を言う美青年が、倉庫に取り付けられた鏡に映る自分自身に酔いしれている。

「……………誰

?あれ……………」

「ん？」

謎の美青年の行動に大夜は引き気味となり、大夜達の存在に気付いた美青年はゆつくり微笑む。

「やあ、キミ達。キミ達もボクの美しい姿を拝みに来たのかい？」

「いや、全然」

美青年の問いに、大夜は即座に否定すると、梓はゴキブリでも見るような表情で美青年を見つめる。

「アンタだったのね。溜臈^{ルチル}屨」

「ふふ。久しぶりだね……………コアベルト」

溜臈屨と呼ばれた美青年は、ブレスレットを左手首に装着させ、大夜を見る。

「その状況についていけないキミ」

「ひょっとして俺の事？」

突然呼ばれた大夜は、戸惑いながら溜臈屨に向き合う。

「この世界で最も美しいボクの名前をキミに特別に教えよう。ボクの名前は『溜臈屨』、アンドロメダの幹部さ」

溜臈屨はブレスレットのスイッチを押すと、結晶がブレスレットから飛び出す。

その結晶を右手で掴み、ブレスレットにセットする。

《ルチルクラッシュ》

瑠璃屢は朱色の戦士『ルチル』に変身した。

「大夜！こつちも変身よ！！」

「あ、ああ！」

梓の身体が輝きだし、リング状になり、大夜の腹部に収束し、コアベルトが現れる。

「あれ？そういえば、ジュエリは？」

『あ』

コアベルトは汗を流し始める。

『家においてきちゃった』

「おいおいおい！？」

—その頃のジュエリちゃん—

「むにゃむにゃ……」

ソファ―に丸まって、ゆったりのお昼寝中。

さらにその隣で、直也はコーヒを飲みながら呟く。

「平和だなあ」

— 體育館・裏 —

「全然平和じゃねえええええええ！！！」

大夜はコアベルトを装着したまま、ルチルの攻撃からひたすら逃げた。

「どうしたんだい？さっさと変身したまえ、張り合いが無いじゃないか」

ルチルは武器であるルチルセイバーで辺りの物を斬り裂いていく。

「どうだい、キミ？この wonderful な切れ味のボクの sa ber で身体中血だらけになってみたくないかい？」

「そんなの嫌だあああああ!!」

大夜は必死にルチルセイバーの餌食にならないように逃げる。

「拒否するのは勝手だけど、いつまで体力が持つかな？」

少しずつだが、大夜とルチルの距離が縮まりつつある。

「くそ！死んでたまるか!!」

大夜は制服のポケットを漁る。

そして、携帯を掴む。

「これだ！」

すぐさま携帯を開き、電話帳から番号を選択し、電話をかける。

——プルルル……プルルル……——

『もしもし』

電話に出たのは、奇跡的にジュエリだった。

「ジュエリ！今すぐ変身してくれ!!」

『なんで？』

「いいから!!」

『もう、大夜はせつかちさんだなあ』

大夜は拳をぎゅっと握り、少しでも安堵し、後ろから追って来るルチルと自分との距離を把握しようとする後ろを向く。

「誰に電話したかは知らないけど、無駄だよ！」

もう間近だった。

「ジュエリ、早く!!」

すると、光の塊が大夜の掌に収まった。

塊の光が消えると、それはダイヤコアだった。

「よし、これで——」

「キミの最期さ!!」

ルチルは一気に走る速度を加速させ、ルチルセイバーを大夜の心臓に向けて突撃してくる。

「間に合ってくれ!!」

大夜はダイヤコアをコアベルトにセットし、水色のスイッチを押す。

「変身!!」

水色の結晶をダイヤコアにセットする。

《ダイヤクラッシュ》

―ガキイイイン！―

ダイヤはルチルセイバーを片手で受け止める。

「危機……一髪だあ」

「その汚い手でボクの清らかなsaberに触れるな」

ルチルは低温の声で言葉を発し、ダイヤの腹部めがけて蹴りを入れようとするが、

「よつと」

ダイヤは寸でのところでルチルセイバーを放し、体勢を立て直す。

そして、戦闘の構えを取る。

「今度は俺がお前を追いつ込む番だ、ナルシスト」

ルチルはルチルセイバーを構え直す。

「それはどうかな？美しいボクに、キズを与えられるのかい？」

水色と朱色の戦士、勝つのは果たして……。

こんな微妙な流れで次回に続く。

ダイヤとルチルとナルシな幹部（後書き）

次回、新フォーム登場！！

ダイヤとルビーと赤い一撃（前書き）

ぐだぐたゝ

ダイヤとルビーと赤い一撃

― 体育館裏 ―

「はああー!!」

「くっ!!」

ルチルセイバーの猛ラッシュに、ダイヤは必死で防御する。

「どうしたんだい？変身したんだから、もっと本気だしなよ？」

「本気出してるっつの!!」

「じゃあ、死んだ方がいいよ！」

ルチルはルチルセイバーを振り抜くスピードを加速させてダイヤを吹っ飛ばす。

「うああああー!!」

ダイヤは壁に激しくぶつかり、気を失いかける。

『ちょっと、ダイヤ！しっかりしなさい!!』

『ファイト、オーだよ』

「二人で一遍に喋らないでよ」

コアベルトとダイヤコアに促されながらも、ダイヤは途方に暮れる。
今回の敵は、前のゲムルグとは全く違う。

前回戦ったのは、本能に忠実なワームランクのゲムルグだったため、
力技で倒せた。

しかし、今回はヒューマンランク、すなわち幹部だ。

戦闘技術も経験も、全てにおいて自分を凌駕している。

「おまけに武器も持つてるし」

ただでさえ狂暴なのに、剣という武器を持っているのはアンフェア
である。

そして、そんなことを思案している間にルチルは一步步前に歩き
ながらダイヤとの距離をゆっくり詰めていく。

「ボクも暇じゃないんでね、そろそろ決めさせてもらっよ」

ルチルは、ルチルセイバーのボタンを押す。

するとルチルセイバーの中心から結晶が排出させ、ルチルはそれを
片手で掴むとコアプレスにセットされたルチルコアにセットする。

《ファイナルクラッシュ》

「さあ、受けたまえ。このボクの……elegantな一振りを」

ルチルセイバーにルチルエナジーが送られ、ルチルセイバーが赤く輝く。

ルチルは、ルチルセイバーを振り上げると移動速度を加速させてダイヤとの距離を一気に詰め、ルチルセイバーでの連続斬り『ルチルハリケーン』を決める。

「ぐあああああ!!」

ダイヤは宙に軽く吹っ飛び、地面に背中を叩きつけられる。

「うつ!」

地面に叩きつけられた衝撃で、ダイヤの変身が解ける。

「「大夜!!」」

ダイヤの変身が解け、コアベルトとダイヤコアの変身も解け、梓とジュエリは大夜に駆け寄る。

「さて、ボクに課せられた命令は…コアベルトとダイヤコアを連れ戻すこと。梓、ジュエリ…勿論ボクと一緒に来てくれるよね?」

ルチルはルチルセイバーの刀身を左手でなぞる。

梓はルチルを睨みながら、言う。

「誰が…あんたみたいなナルシなんかと!!」

ルチルはその返答に、大して反応を起こさず冷淡に言う。

「ふーん、じゃあボクと一緒に来ないわけか……。悲しいね…」

「心を持ってないくせに、悲しいなんて笑い話ね」

梓のその一言に、ルチルは初めて反応する。

「あんまり調子に乗らないでくれるかな？それと、ボクにはもうひとつ命令があつてね……。もしもコアベルトとダイヤコアがボクの誘いを断った場合……。ボクの好きなように処分していいってさ」

ルチルはルチルセイバーの刃先を梓とジュエリに向ける。

「キミ達、このボクのelegantなsaberに斬られる事を………誇りに思え」

ルチルはルチルセイバーを振り上げ、梓とジュエリに攻撃を加えようとする。

「やめろおおおー!!」

大夜は立ち上がり、手元にあつた鉄パイプでルチルの顔面を殴打する。

「ぐっ?!」

予想外の大夜の攻撃に、一瞬だけだがよろめく。

「キミ……黙って倒れてることの方が賢明だとは思わないのかい？」

「うるさい！俺はヘタレだけど…女の子二人を見捨てるほど、落ちぶれちゃいない！！」

大夜は鉄パイプを構え、梓に言う。

「梓！ジュエリちゃん！もう一度…変身だ！！」

梓とジュエリはゆっくり頷き、両手を交差させる。

「変身！」

「へーんしん！」

梓はコアベルト、ジュエリはダイヤコアに変身した。

コアベルトは大夜の腹部に装着され、ダイヤコアは大夜の右手に収まる。

大夜はダイヤコアをコアベルトにセットし、水色のボタンを押し、ダイヤコアから排出された水色の結晶を両手で掴む。

「変身！！」

水色の結晶を反転させ、ダイヤコアにセットする。

《ダイヤクラッシュ》

大夜は水色の装甲に覆われ、仮面ライダーダイヤに変身した。

すると、コアベルトに取り付けられている四色のボタンのうち、赤

いボタンが光輝く。

「これは…？」

『『新しい…力』』

コアベルトとダイヤコアにそう言われ、ダイヤは赤いボタンを押す。すると、ダイヤコアから赤い結晶が排出させ、変身の時と同様に両手で掴み、反転させてダイヤコアにセットする。

《ルビークラッシュ》

ダイヤの水色の装甲が赤くなり、ダイヤ『ルビークラッシュ』にクラッシュチェンジした。

そして、ダイヤの手元に長剣『ルビーブレード』が握られる。

その様子をルチルは冷淡そうに見つめ、溜息を吐く。

「理解できないね。うん、理解できない。『女の子二人を見捨てるほど、落ちぶれちゃいない』？笑わせないでよ、その二人はコアベルトとダイヤコアだ。すなわち、人間じゃなくてモノだ」

ダイヤは首を横に振る。

「違う。梓とジュエリは、人間だ！！」

そしてルビーブレードを構え、ルチルに突っ込む。

「ホントに、理解できないよ!!」

ルチルセイバーとルビィブレードが交差し、辺りに火花が散る。

「決めたよ。ボクは、キミごとコアベルトとダイヤコアを処分することにしたよ!!」

ルチルはルチルセイバーを握る強さを増す。

「貴方の名前、確か瑠璃屢とか言っただよね？」

「それがどうしたんだい？」

「じゃあ、瑠璃屢さん。貴方、俺に敗れる敗因……聞きたくないですか？」

「キミに敗れる敗因？それは、物凄く興味深いね。よかつたら聞かせてよ」

ダイヤはルビィブレードを強く握る。

「貴方の敗因……それは、自分の力を過信しすぎた事だ!!」

ダイヤはルビィブレードでルチルセイバーを弾き飛ばし、ルビィブレードの赤いボタンを押す。

するとダイヤコアから金色の結晶が排出され、ダイヤはそれを片手で掴み、ルビィブレードにセットする。

《ファイナルクラッシュ》

ルビーブレードにルビーエナジーが送られ、ダイヤはルチルに必殺の一撃『ルビースラッシュブレイク』を決める。

「ぐあああああ!!」

ルチルは後方に吹っ飛び、変身が解ける。

「この…ボクが…負ける…なんて…ふふ…はははははははは!!」

瑠璃屢は異空間を形成し、消えていった。

「やった…勝ったあ」

ダイヤは変身を解くと、そのまま気絶した。

—翌日—

—ガヤガヤ—

教室中が賑わっている。

すると、担任の司が入ってきた瞬間、三人組が司に一斉に発言する。

「先生!!」

「転校生は!!」

「女ですか!?!」

司は三人組の頭を順番に名簿帳で叩いていく。

「「痛っ!!」」「」

「ったく。じゃ、転校生……。出てこいや!!」

どっかの格闘家のネタですが、気にしないように。

扉が開き、転校生が二人入ってきた。

「菱形梓」

「ジュエリだよぉ」

「ズルッ! ガシャン!!」

大夜は盛大に転げ落ちた。

「父さん、母さん。彼女達は俺の学校での平穩さえ、奪う気です」

ダイヤとルビーと赤い一撃（後書き）

グダグダ〜

ダイヤと恐怖と通りすがりの支配者さん（前書き）

執筆中作品を整理していたら書き溜めていたのを発見。

加執修正して次話投稿しました。

長らく放置していてすみません。

今回は、前作の主人公がプチ活躍します。

ダイヤと恐怖と通りすがりの支配者さん

試練……それは人生と密接に深く関わるもの。

人は生まれた瞬間から既に試練と向き合う生き物。
それ故に、人は生きる事に苦しむ。

しかし、人の中には試練を自らの人生を華やかなものにするために
利用する者も居る。

そう。

試練を苦に思うかどうかは、当事者自身の気の持ちようによるのだ。

「……………」

七都の北地区、その中でも異彩を放つ高校『結晶学園』。

今話で初めて学校名が明かされたが、その結晶学園の一生徒である
『菱形大夜』。

彼はある試練にぶち当たっていた。

——俺は気づけなかった。

いや、気づきたくなかったの間違いか。

どちらにしろ俺は、奴らの侵入を許してしまった。

クソ、なんで気づけなかった！！

そうだ、奴らは俺から平穏を奪った。

そんな奴らが、何故ここまで侵入してくるかなんて普通なら考えら

れた筈じゃないか!!

しかし、しかしだ!!

俺には考えられなかった事がある。――

「なんでジュエリまで入学してんの?!」

梓とジュエリを廊下に呼び出した大夜は、特にジュエリに向かって声を荒げる。

まあ、確かに。大夜の気持ちは理解できる。

「五才児が高校生って何?!」

「何よ、あんた。ジュエリだけ差別する気?」

梓は大夜に蔑みの視線を送り、ジュエリは頬を膨らませながら大夜に言う。

「大夜はジュエリの事嫌いなのか?」

「い、いや……そういうわけじゃないけど」

「ジュエリも梓と大夜のガッコーに行きたいもん!!」

大夜は溜め息を吐きながら梓に尋ねる。

「この際、学校に通う事はもう何も言わないけどよ。ジュエリは授業についていけるのか?」

「その点は心配いらないわ。ね、ジュエリ?」

「もっちろんだよお」

ジュエリは胸を張りながら自信満々に断言した。

一時限目・数学

外矢教員は黒板に数式を書き記す。

「んじゃ、この問題を……………ジュエリ、答えろ」

（ちょ、先生！明らか五才児に解ける問題じゃないですって！！）

大夜は内心悲鳴をあげる。

外矢教員がジュエリに問う問題は、積分による放物線と直線の面積を求める問題だったからだ。

外矢教員に指名されてからジュエリは数秒で立ち上がり、言い放った。

「サンぶんのサンジュウニ」

流石五才児、アクセントがおかしい。

一方ジュエリの解答に外矢教員は眉間にしわを寄せるが、平然とジ

ユエリに告げる。

「正解だ。流石、IQ300を誇る我が校始まって以来の飛び級生だな…。じゃあ、次の問題を……菱形梓、答えろ」

(IQ300?!)

大夜は外矢教員の言葉に目を剥く。

(マジかよ……。ジュエリの奴…すげえ)

そして今度からジュエリに対してあまり子供扱いするのをやめる事を決意した大夜だった。

(ん?)

大夜は疑問に感じた。

(梓の奴……いつまで考えてるんだ?)

黒板に書かれた式をしてみるが、ただの積分の応用問題…そこまで難しくはない。

(これって偏見だけど…梓みたいな気の強い女子って大体頭良いよな)

そんな事は置いといて、梓の思考時間が長い。

「おい、梓って——え?!」

大夜は梓の顔を覗いてみると、梓は白目を剥いて失神していた。

「梓?! おい、梓しっかりしろ!!」

「菱形梓が倒れたか……。流石、本校始まって以来のオール0を取った生徒だな」

「オ、オール0?!」

オール0とは、編入試験の結果が全科目0点である事を意味する。

「えええええ?! じゃあ、どうやってこの学校に入学できたの?!」

「スポーツ推薦だ」

大夜の叫びに外矢教員が答えた。

「スポーツ推薦?! それだけじゃカバーするの無理ですよ!!」

「それがなあ、菱形梓はそれをやったのけたんだよ」

「うつそ?!」

外矢教員曰く、この結晶学園で行われるスポーツ…陸上から球技の全てにおいての記録を大幅に塗り替える成績を治めたため、オール0でありながらも特別に入学を許可したという。

「んじゃ、菱形。お前、菱形梓を保健室に連れて行け」

「はい……」

大夜は梓に肩を貸し、保健室へ連れていった。

二時限目・現国

現国は海道理沙という、セミロングでクールな印象を持つ女性教員が担当。

「……………。このクラスには重症な患者が居たかしら？」

海道教員の視線の先……梓は身体中痙攣していた。

「せ、先生！俺が保健室に連れていきます……！」

梓は大夜に保健室に連行された。

三時限目・音楽

この授業は、紅明良教員が担当。

大夜は紅教員に、自分と同じもの——ヘタレを感じ取り、親近感が沸いた。

『ギイイイイガアアアアアア！！！！！』

梓がピアノを弾いたところ……ピアノから悲鳴が聞こえ、紅教員はあまりの騒音に気絶してしまった。

「な……なんで……ピアノから悲鳴が………」

「すみません、先生！！」

大夜は紅教員を保健室へ運んだ。

四時限目・技術

真面目そうなある程度好感が持てる男性教員——三神修教員は、苦笑いで梓に言う。

「なんでお前が文字を打つ度にパソコンの画面が爆発するんだ？」

「パソコンの根性が足りないからです」

「んなわけあるか！！」

その頃大夜は……爆発に巻き込まれた生徒を保健室に運んだ。

―昼―

「って梓！俺、今日の午前中ほとんど保健室に誰かを運ぶだけで全然授業受けられなかったんだけど？！」

「大変ねえ」

「それだけ？！」

梓は興味なさそうにお弁当を食べていく。

「はぁ……。俺の唯一の安息の場所までもが……………」

「大夜、ふぁいと〜！」

ジュエリに慰められながら、大夜は自身の弁当箱を開ける。

―教員会議―

司によって集められた理沙、優希、明良、修。

「あれ？皆、どうしたの？」

優希は自分以外の全員がどこか疲れたような表情に疑問を抱く。

「まあ、あれだ。とりあえず皆……ご苦労さん」

「「「……………」」」

司の労いの言葉に、理沙、明良、修は遠い場所を見つめる。

「ねえ？何なの？どうしたの？無視？無視なの？」

誰も優希に反応しない。

「んじゃ、本題に入るぞ」

司の言葉に、全員が真面目な表情に変わる。

「単刀直入に言えば、うちの生徒がアンノウンに襲われかけた」

「襲われかけた？」

明良は疑問に抱いた。

「正確には、襲われそうだったのを助けた奴がいた」

「それって……………」

理沙はある程度読めたようだ。

「ああ…………ガルスだ」

「司、ガルスには誰が変身したんだ？まさか……ここの生徒って事は…無いよな？」

「察しの通りだ、修」

すると、優希は司に尋ねる。

「ねえ、司」

「何だ？」

「その生徒って……ひょっとして荒宮真って子？」

「ああ」

司は全員を見渡しながら言う。

「いいか、皆？俺達の敵は、あくまで生徒に害を為す者だけだ。ゲムルグ、さらにアンノウンとも戦うのが多くなるだろうな……。だけれどな、俺達の役目はそれと同時に生徒の味方であるという事だ。生徒が苦しい時は、必ず手を差し伸ばすように」

司がそう言い終わると、優希達は頷き、自分達の職場に戻っていった。

司は「ふうー」と息を吐き、理事長席に腰かける。

「あーあ、理事長めんどくせー」

――放課後――

「大夜、早く帰るわよ」

「へいへい」

「か・え・ろおゝ！」

梓と大夜とジュエリは身支度を済ませると、昇降口へ向かう。

その時だ。

「きゃあああああ！！」

女性の悲鳴が聞こえる。

「?!」

大夜達は慌ててそこへ向かう。

―校庭―

『グアアアアア……』

ホッパーゲムルグは女教員の胸部を腕で貫くと、中からクリスタル状の物を抜き取った。

クリスタル状の物を抜き取られた女教員は服だけ残して砂となり消え去った。

クリスタル状の物体は、どうやら人間の『心』のようで、ホッパーゲムルグはムシャムシャと心を食べ始めた。

『う……ま……い、もつと……もつと心を……！』

ホッパーゲムルグの身体に亀裂が走り、ホッパーゲムルグはタイガーゲムルグにランクアップした。

「っ！」

一部始終を見ていた大夜は、身体を震わす。

まだ十六の少年にとって人間が砂となって崩れる瞬間は恐怖以外の

何物でもない。

「大夜、変身するわよ!!」

「……………」

「大夜!!」

梓の呼び掛けで放心状態だった大夜は正気を取り戻す。

「あ…………ああ」

次の瞬間、梓とジュエリはコアベルトとダイヤコアに変身した。

大夜はダイヤコアをコアベルトにセットし、水色のボタンを押す。
そして、出現した菱形状の物体『ダイヤフォース』を反転させ、ダイヤコアにセットする。

《ダイヤクラッシュ》

大夜は仮面ライダーダイヤに変身し、タイガーゲムルグに突っ込む。

『お前喰らって…………幹部になる!!』

タイガーゲムルグは加速し、ダイヤの背後に回る。

「っ?!」

『ガアアアアア!!』

ダイヤは何とか避ける。

「は…速い……」

『大夜、あのゲムルグは要注意よ』

「言われなくたって!!」

しかし、目にも止まらないスピードに、ダイヤは翻弄される。

ダイヤはタイガーゲムルグの予測できない動きによってダメージが蓄積される。

それに加えて、ダイヤは先程見たゲムルグの捕食を見たためか、中々攻撃できない。

(怖い……俺…怖がってる……無理だ…俺には倒せない!!)

ダイヤは地面に方膝をついてしまった。

『ちょ、ちょっと?!大夜、しっかりしなさい!!』

『大夜、倒れちゃダメ!!』

「俺じゃ…勝てない」

方膝をついたダイヤに向かってタイガーゲムルグが突っ込む。

《アタックライド……ブラスト!!》

『なあああああ!!』

タイガーゲムルグは何者かが放った銃弾によって吹っ飛んだ。

「おい、菱形。なんて様だ？」

ダイヤを助けたのは、世界の破壊者・仮面ライダーディケイドに酷似した戦士だった。

ディケイドの緑色の瞳を青くさせ、マゼンタの部分をバイオレットにした戦士『仮面ライダーディサイド』。

その能力はディケイドを上回っており、27枚のカメンライドカードと40枚を超えるアタックライドカードとディフェンスライドカードを所持している。

別名『闇の支配者』。

「その声……もしかして……外矢先生ですか？」

「ああ」

『グアアアアア!!』

ディサイドに吹っ飛ばされたタイガーゲムルグはディサイドに飛びかかる。

「先生！！危な——」

ディサイドは黒いライドブッカーからカードを取り出し、バツクルに装填する。

《アタックライド……クロックアップ！！》

次の瞬間、ディサイドはクロックアップ状態となり、タイガーゲムルグの移動速度を大きく上回る。

そして、カードをバツクルに装填する。

《ファイナルアタックライド……ディ・ディ・ディ・ディサイド！！！！》

ディサイドの前に何枚もの巨大なライドカードが出現し、ディサイドは飛び上がる。

空中で飛び蹴りのポーズを取りながら、ライドカードを突き抜けるがタイガーゲムルグに『ディメンションキック』を喰らわす。

『又アアアアアア！！！！』

タイガーゲムルグはあっという間に爆発四散した。

デイスイドはバックルを開放させて変身を解くと、その場から去った。

ダイヤはタイガーゲムルグの亡骸を見ながら、意気消沈した。

——父さん、母さん……俺って無力です……——

ダイヤと恐怖と通りすがりの支配者さん（後書き）

次回予告……かもしれない

「俺は……もう戦えない」

「お前……自分の世界を見捨てるのか？」

「梓さん、相談に乗ってもらえませんか？」

「だったら先生がゲムルグと戦えばいいじゃないですか!!」

「馬鹿野郎!!」

まだ十六歳である大夜には、戦場は彼に深い心の傷を与えるだけだった。

そして、大夜は仮面ライダーの力を手放す事を決意。
だが、そんな事は誰も許しはしなかった。

逃げる大夜と追う司。

逃げる事は出来ても、進む事は難しい。

『ダイヤと支配者と使命の重さ』

あなたの心は、本物ですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7733m/>

結晶戦士・仮面ライダー（ダイヤ）

2011年10月6日06時37分発行